

「漢方薬使用実態及び漢方医学教育に関する意識調査 2012」

診療所の91.8%が漢方薬を処方、86.3%が高齢者医療に漢方を重視
約50%が総合的な診療能力を持つ医師養成に漢方の役割を指摘
科学的データの報告で漢方薬に処方変更する医師が45.5%

日経メディカル開発では、日経メディカル ON LINE の登録医師を対象に、漢方薬の使用実態と漢方医学教育に関する考え方を把握するため、「漢方薬使用実態及び漢方医学教育に関する意識調査 2012」を実施、その調査結果がまとまった。
調査実施概要、調査結果の概要は、以下の通り。

＜調査概要＞

- ・調査対象: 日経メディカル ON LINE 登録医師
- ・調査主体: 株式会社 日経メディカル開発
- ・調査機関: 株式会社 日経BPコンサルティング
- ・調査期間: 2012年1月24日～2月1日
- ・調査方法: 日経メディカル ON LINE 登録医師に調査依頼メールを配信、回答画面にアクセスしてもらい回答
- ・有効回答: 351名
回答者属性は、診療所開業・勤務(20.8%)、病院開業(0.9%)、大学病院勤務(16.8%)、一般病院勤務(58.7%)、その他(2.6%)。
20代(4.0%)、30代(24.2%)、40代(34.5%)、50代(27.1%)、60歳以上(9.1%)となっている。

＜調査実施の背景＞

医療現場で患者の漢方に対する需要が非常に高く、医師に漢方の知識が不可欠になっており、全国の医学部、医科大学で漢方医学教育をさらに充実していくことが指摘されている。
昨年3月文部科学省の「医学教育モデル・コア・カリキュラム」改訂版(平成22年度)が決定し大学や臨床研修病院などに周知された。
改訂版は基本的診療能力の確実な習得、地域の医療を担う意欲、使命感の向上、基礎と臨床の有機的連携による研究マインドの涵養などから構成され、基本的診療能力の確実な習得のなかで薬物療法の基本原理で漢方を重視しており「和漢薬を概説できる」から、さらに具体的に「和漢薬(漢方薬)の特徴および使用の現状を概説できる」に改訂された。社会的な要請が高く、とくに高齢者医療における漢方医学の役割が再認識され医学部教育で漢方に係る内容を盛り込むべきとの考えがあったと見られている。教育面が重視されている一方で、漢方薬の基礎研究が積極的に行われ科学的な解明が進んでおり、漢方薬のなかには西洋薬にはみられない効果が米国の研究者らによって報告されるなど、漢方が世界的に評価されてきている。臨床現場では西洋医学のみの治療では限界があること、超高齢化社会を迎え多臓器疾患に罹患しやすい高齢者医療に漢方への期待も大きい。
こうした状況を踏まえ、日経メディカル開発では日経メディカル ONLINE の登録医師を対象に、漢方薬の使用実態、高齢医療と漢方、医学教育と漢方、がん療法と漢方についてどのように考えているかなどを明らかにするため調査を実施、351人から回答があった。

<調査結果概要>

●診療所の91.8%が漢方薬を処方、全体でも83.8%が漢方薬を処方

全医師の83.8%が漢方を処方している。診療所では91.8%、大学病院では84.7%、一般病院では81.1%が漢方薬を処方するなど、日常診療で漢方薬が不可欠になっている現状が浮き彫りになった。57.8%が西洋薬と漢方薬を使い分け、30.5%が西洋薬では期待した効果が得られないときに漢方薬を使用していた。

処方する疾患は感冒・急性上気道炎が最も多く70.4%で、次いで、便秘(52.1%)、こむらがえり(50.0%)、食欲不振、胃もたれ、消化不良など消化器愁訴(34.7%)、咳・痰(32.0%)、更年期障害(29.9%)、イレウス(腹部愁訴)(29.0%)、認知症および周辺症状(24.6%)、冷え症、凍瘡(23.1%)、アレルギー性鼻炎(20.4%)、自律神経失調症(20.4%)、不定愁訴・軽うつ状態(19.2%)などとなっている。

よく使う漢方薬の第一は葛根湯で70.7%が処方しており、次いで大建中湯(58.7%)、芍薬甘草湯(47.9%)、補中益気湯(40.4%)、小青竜湯(35.9%)、六君子湯(33.5%)、抑肝散(31.1%)、麦門冬湯(27.5%)、加味逍遙散(26.3%)、牛車腎気丸(25.1%)などだ。

●漢方薬の使用動機に62.9%が西洋薬のみの治療では限界

漢方薬を処方した動機として西洋薬のみの治療では限界があることを指摘する人(62.9%)が半数を超えている。高齢者など複数疾患を抱えた患者が増えたから(28.4%)、学会などで漢方薬の科学的根拠(エビデンス)が相次いできたから(26.9%)、患者のQOLを高め全人的医療が出来るから(20.4%)、患者からの強い要望があったため(20.4%)などの意見もみられた。

69.5%が漢方薬を処方して良かったと評価しており、その理由として薬物療法の選択の幅が広がった(78.4%)、治療効果が上がり患者に喜ばれた(65.1%)、新しい治療体系を体得できた(25.9%)などを挙げていた。

●漢方の新発見で漢方薬に処方変更した医師が半数近くに イレウス、アルツハイマー型認知症などに処方変更

この数年、国内外の学会で漢方薬の薬効、薬理などについて新しい知見が相次いで報告されていることもあり、処方に漢方薬を加えたり、あるいは新薬から漢方薬に変更する人が半数近くの45.5%に達した。

漢方薬に処方変更などを行なった疾患のうち最も多かったのが、イレウスに大建中湯(52.0%)で、次いでアルツハイマー型認知症に抑肝散(46.7%)、消化管機能障害に大建中湯(37.5%)、機能的ディスペプシア(FD)に六君子湯(35.5%)、GERD(胃食道逆流症)、難治性のNERD(非びらん性食道逆流症)に六君子湯(25.7%)、非アルツハイマー型変性認知症に抑肝散(25.0%)などを挙げていた。

●高齢者医療に漢方を使用する医師が70%以上に

平成25年から新しい高齢者医療制度スタートするなど高齢者医療のあり方が社会的に大きな課題となっている。従来から複数疾患に罹患し多剤併用されている高齢者の薬物治療に全身状態を把握し一つの方剤で多愁訴に有効な漢方薬の役割は大きいといわれていたが、71.8%が高齢者に漢方薬を使用していた。漢方薬を積極的に処方しているが27.7%、患者の要望があれば処方しているが44.4%となっている。

48.0%が高齢者に漢方薬を使用し治療効果が上がったと評価し、40.1%が患者から喜ばれた、22.2%が患者のQOLが上がった、17.9%が副作用を軽減できたなどを挙げていた。

超高齢化社会を向かえて、全身的な医療である漢方を重視する人が86.3%に達した。高齢者医療において、漢方が患者によっては期待される(78.6%)、総ての高齢患者に大きな役割が期待される(7.7%)となっている。

●半数近くが総合的な診療を持つ医師に漢方の役割は大きいと回答

高齢者の増加による疾病構造の変化、患者ニーズの多様化などに対応できる医師養成が課題になっており、高齢化の観点から様々な疾患に対応できる総合的な診療能力を持つ医師の育成が文部科学省、厚生労働省の委員会などで審議が進んでいる。

患者を総合的にみる医師の養成に全人的な医療である漢方を重視する人が48.4%と半数近くに達し、そのためには漢方薬を含めた総合的な診療の知識が修得できる教育体制の確立をあげる人が68.8%と7割近くにのぼった。

さらに漢方の基本である問診と身体所見を重視する全人的医療を修得させる(58.8%)、卒前から漢方薬を日常診療で使う機会が多いことを教育する(44.1%)など漢方医学教育の充実を指摘している。

医学部教育では昨年3月はじめには医学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂版(平成22年度)が決定し、基本的診療能力の確実な修得のなかで薬物療法の基本原理で漢方を重視しており、それまでの「和漢薬について概説できる」から「和漢薬(漢方薬)の特徴および使用の現状を概説できる」に改訂された。改訂に向けた中間とりまとめ案のパブリックコメントでは「医療現場では患者の漢方に対する需要が非常に高くプライマリケアに携わる医師にとって漢方の知識は必要不可欠であり漢方医学に罹る内容を盛り込むべき」といった意見がみられるなど医学教育で漢方の教育に必要性を説く人少なくない。

医学部で教育する具体的な内容として漢方薬の治療効果が期待できる疾患(61.5%)、エビデンスに基づいた漢方薬の使い方(60.1%)、漢方薬の適切な処方(53.0%)、代表的な漢方薬の構成、薬理作用(43.6%)、漢方薬の適応症、汎用処方の実態と使用頻度(35.6%)、漢方薬と西洋薬の違い(35.3%)などを挙げている。

今回のモデル・コア・カリキュラムの改訂で学部教育で漢方を充実させていくには教育、診療が出来るスタッフを拡充する(52.7%)、漢方の講義のコマ数を増やす(43.0%)、漢方外来などを見学させて使用実態を把握させる(33.6%)、関連科目にも漢方を取り入れる(31.6%)などの対応をあげている。

さらに漢方医学教育を充実させていくため漢方医学教育の標準化(43.6%)、治療の基本、代表的な処方運用のため臨床実習の検討(24.2%)、漢方指導医の養成(19.1%)、モデル・コア・カリキュラムに準拠し必須科目として4年次までに教育する(8.5%)といった考えを示していた。

●半数の医師が漢方のがん化学療法の副作用防止、軽減を期待

がん治療についても漢方の役割が評価されてきている。新しい抗がん薬の開発、放射線療法の改良などにより著しく進歩しているが、その一方で、これらの治療法による副作用の軽減が課題になっている。

がん化学療法による副作用である末梢神経障害に牛車腎気丸(19.7%)、食欲不振に六君子湯(15.8%)、下痢に半夏瀉心湯(14.5%)などが処方されていた。

がん医療における漢方薬の今後について、50.1%が抗がん療法による副作用防止とその軽減、23.9%が抗がん薬の補助的、または支持的治療、20.5%が免疫賦活作用、抗腫瘍作用、発ガンの予防効果などに期待を寄せていた。

がん治療では患者のケアも重視されており、がんの緩和医療では全身状態を把握して身体的な問題と精神的な問題を一体化して考える漢方に期待が寄せられており、がん緩和医療における漢方の役割について 65.2%が QOL の向上、51.0%はがん治療に伴う副作用対策、44.2%はがん進行に伴う多彩な症状の緩和、18.8%が価値のある延命効果を挙げている。

●さらなる漢方の普及に 82.9%が科学的エビデンスの構築が課題

米国の消化器病週間(DDW)、米国大腸肛門外科学会(ASCRS)で、毎年、大建中湯、六君子湯などの作用機序が発表されるなど海外で漢方が評価されてきたが、今後漢方の普及させていくためには、82.9%が科学的エビデンスのさらなる構築、21.9%が漢方外来の充実、20.8%がモデル・コア・カリキュラムで早期行い漢方医学教育を充実させるなどを挙げている。

複数疾患を抱えた高齢者の増加、西洋薬のみの治療には限界があることや患者からの漢方処方の強い要望などを考えると、西洋医学と同じように漢方医学の診療能力を持つ医師の養成が急務で、医学部で漢方の教育を標準化し講座数を増加し卒後の臨床研修を充実させる必要がある。そのためにも卒前、卒後の一貫した漢方医学教育が求められている。

※株式会社日経メディカル開発の事業内容は、下記 URL にアクセスしてご覧ください
<http://medicalkaihatu.nikkeibp.co.jp/>

<お問合せ>

株式会社 日経メディカル開発

担当: 倉井 和彦

〒108-8646 東京都港区白金 1-17-3

Tel 03-6811-8780(代表) Fax 03-5421-9140

nmcp-ad@nikkeibp.co.jp